

ポートランド日本語補習授業校の子ども達の異文化適応

—学習・言語・アイデンティティ面から—

梶田正巳 早矢仕彩子¹⁾

はじめに

戦後の日本経済の発展につれて、海外で仕事をする日本人の数は飛躍的に増加している。それにともなって、同行する家族数、特に海外における学齢期の子供達の数も増加し、平成11年5月1日現在、その数は48,951人に達している(外務省調べ)。彼らの存在が各方面からの注目を集め、海外子女また帰国後は海外帰国子女として論じられるようになってから久しい。心理学の分野でも、帰国後の適応問題、アイデンティティ形成の問題、バイリンガルの能力などに関して、多くの研究がなされている。(斉藤, 1983; 箕浦, 1984; 山本, 1991など多数)。

かつて1980年代には、帰国子女の特殊性が取り上げられることも多く、考え方や行動の違いに起因する学校不適応、学校でのいじめなどが取りざたされ、マスコミでもセンセーショナルに報道されることが少なくなかったが、その後、海外滞在時における父兄達の努力、帰国子女受入校の増加などの制度的な整備などによってそのような問題は減少し(南, 2000)、海外子女・帰国子女の捉え方にも変化が見られるようになってきた(Goodman, 1990; 佐藤, 1997)。そして、異文化圏で成長し、教育を受けるという体験をしてきたということが、彼らの成長にどのように影響するのか、そしてそれを今後にどのように生かしていくことができるのかという、異文化体験の積極的な意味が検討されはじめているが(梶田, 1997など)、今後はさらにこういった視点での研究が積み重ねられていくことと思われる。

海外で学ぶ日本人子女は、異文化の中で成長期を過ごし、そのうちのまた多くは、母語とは異なった言語環境の中で学校教育を受けるという経験をしていく。そのような自己のおかれた環境を、彼らがどのように捉え、その環境の中でどのような葛藤を覚えつつ、どのように取り組み、いかに自己を形成して行っているのか、これら問題には非常に興味深いものがある。

海外に出る日本人数のみならず、日本国内の外国人数も近年めざましく増加しており、好むと好まざるとに関わらず、日本社会の国際化は加速度的に進んでいる。それにつれて日本国内において、国際化教育が学校教育における重要なテーマとなってきているが、海外の教育環境における日本人子女の自己形成過程は、このような日本の教育現場にも、少なからず示唆を与えることができるに違いない。

平成12年1月25日から約10日間にわたって、ポートランド補習授業校を訪れ、補習校のご協力の下に、そこで学ぶ日本人子女の様子を参観したり面接をしたり、また質問紙調査や父兄との座談会の機会を、また週日には、彼らが在籍する現地校の様子の参観をするという機会を得ることができたが、この論文では、その際に実施した質問紙調査の結果を中心に、子ども達への面接、父兄との座談会の記録を織り交ぜながら、ポートランド補習授業校に在籍の日本人児童・生徒の異文化圏での学校生活の状況と、その環境に学んでいる自己の置かれた環境に対する自らの捉えを、学習・言語・アイデンティティの面から論じていく。

1. ポートランド補習授業校(日本人学校)について

アメリカ西海岸にある土曜補習校の一つである。生徒数は平成12年4月29日現在278名、北米地域の補習校全82校中18番目の多さであり、学校の規模としては中規模とすることができる。この学校の大きな特徴としては、北米地域の週1日の補習校中最多の、年間50日授業を実施しているということが挙げられる(最少36日~最多50日、最頻授業日数範囲は40日~45日:60校、ポートランド補習授業校調べ)。年間授業時間数が最多であること、入学試験制度、落第制度が導入されており、基準に達しない日本語レベル・学力レベルのものは入学や進級に際して妥協をしないという姿勢からも分かるように、ポートランド補習授業校は北米地域にある補習校中、日本語による学力レベルを落とさないために最大限の努力を払っ

1) 三重大学人文学部

ている学校の一つとあってよいだろう。学習科目は算数(数学)と国語の2教科であり、この2教科に関してはほぼ日本国内における学習時間数をカバーしている。このほかのポートランド日本人学校についての詳細については、報告書を参照されたい(早矢仕, 2000)。

2. 質問紙調査について

質問紙：質問紙の構成と質問項目については付録のとおりである。

調査対象：ポートランド補習授業校在校生のうち、小学校3年生までを除き、4年生以上高校生までの生徒すべてを調査対象とした。

調査方法：調査用紙は教室において各担任教師より配布され、即日教室において記入、回収したクラスと、父兄に対する質問紙調査協力依頼文書とともに家庭に持ち帰り、次週土曜に提出するよう指示されたクラスに二分された。回収は、即日記入分と次週提出されたものは帰国時に持ち帰り、次週以降に遅れて提出されたものについては、補習校より後日まとめて郵送された。

回収率：当時の総在籍数と回収された質問紙数(かっこ内)は、4年生：37(23) 5年生：29(15) 6年生：25(16) 中1：19(16) 中2：20(14) 中3：15(13) 高校生：18(12)であり、回収率は小学高学年平均59.3%、中学生平均79.6% 高校生66.7%、全平均66.9%であった。なお、回答者の性別、学年、米国滞在年数は表1に示した。

学習面について

ポートランド補習授業校に学ぶ子ども達は、週日は現地校での英語によるアメリカの公教育を受け、土曜日は補習授業校での日本の教育システム・指導要領に基づいた教育内容を学習するという、いわば二重の教育環境を選択している子どもたちである。このような形の教育

環境の中で、彼らは現地校における各教科の学習に対してどのような意識を持っているのだろうか。まずは質問紙調査の結果を踏まえながら、この点について見て行きたい。

(1) 質問紙調査結果

(1)-1 どの科目がむずかしいか、やさしいか

まず、“現地校で、あなたはどの科目が一番むずかしいですか”“現地校で、あなたはどの科目が一番やさしいですか”の質問に対する答えから見る。表2-1に示したように、むずかしい科目は小学高学年では社会、中学生では理科、高校生では社会と英語という答えが多く、やさしいと感じる科目では、いずれの学年層でも算数(数学)という答えが圧倒的多数であった。総じて言えば、むずかしいと感じる科目には社会科理科英語のなかの1科目を挙げ、やさしいと感じる科目には算数(数学)をあげる、という答え方をしたものが多し。

一般的に、日本人子女が海外の現地校で学ぶ場合、算数(数学)をやさしいと感じ、実際よい成績を修めることが出来るということは周知の事実でもある。それは日本の算数(数学)教育が現地校よりも進度が早いことから、現地校での学習は日本人子女にとっては復習の形になること、また算数(数学)の成績や能力発揮の中では計算能力の占める比率が高く、言語そのもの(アメリカの場合は英語)の能力が十分でなくても対応できる部分が大であるからだと考えられる。それに対して、社会科理科英語は、週1日授業しかないほとんどの補習授業校では学習科目とされていない(ポートランド補習授業校でも同様)ため、算数(数学)のような復習の形は全くなく、現地校において初めてその科目を、しかも英語によって学ぶことになる。そこでは、英語能力の高低が直接的に学習内容の理解や課題の遂行に関係してくると考えられ、特に、滞米年数が短く英語能力のまだ不十分な生徒ほど、多くの困難を感じるのではないかと思われる。

表1 回答者一覧

学 年	性別人数			米国滞在年数別人数			学年計	合 計
	男	女	無記入	3年未満	3～5年	6年～(うち米国生)		
小4	14	9		7	5	11(6)	23	
小5	9	6		5	6	4(3)	15	
小6	9	7		5	6	5(0)	16	54
中1	6	10		4	11	1(0)	16	
中2	5	7	2	5	3	6(2)	14	
中3	4	8	1	3	6	4(1)	13	43
高1	5	2		2	4	1(1)	7	
高2	3	1		1		3(1)	4	
高3	1	0				1(1)	1	12
合 計	56	50	3	32	41	36(15)		109

表 2-1 むずかしい科目やさしい科目 (学年別)

むずかしい科目									
	小 4 n=23	小 5 n=15	小 6 n=16	高学年計 n=54	中 1 n=16	中 2 n=14	中 3 n=13	中学生計4 n=43	高校生計 n=12
英 語	10	6	2	18	6	0	4	10	5
算 数	0	0	1	1	0	1	1	2	1
理 科	6	4	4	14	5	7	6	18	2
社 会 科	5	6	8	19	5	7	3	15	5
な し	0	1	1	2	0	0	0	0	0
分らない	1	0	0	1	0	0	0	0	0
無 記 入	1	0	0	1	0	0	0	0	0
計	23	17	16	56	16	15	14	45	13
複数回答	-	2	-	2	-	1	1	2	1
やさしい科目									
	小 4 n=23	小 5 n=15	小 6 n=16	高学年計 n=54	中 1 n=16	中 2 n=14	中 3 n=13	中学生計4 n=43	高校生計 n=12
英 語	4	2	3	9	0	4	1	5	0
算 数	19	14	14	47	16	10	12	38	9
理 科	0	0	2	2	0	1	0	1	2
社 会 科	0	0	1	1	0	0	1	1	1
な し	0	0	0	0	0	0	0	0	1
分らない	0	0	0	0	0	0	0	0	0
無 記 入	1	0	0	1	0	0	0	0	0
計	24	16	20	60	16	15	14	45	13
複数回答	1	1	4	6	-	1	1	2	1

表 2-2 むずかしい科目やさしい科目 (滞在年数別)

むずかしい科目									
	小学校高学年			中 学 生			高 校 生		
	0~3年 n=17	3~5年 n=17	6年以上 n=20	0~3年 n=12	3~5年 n=20	6年以上 n=11	0~3年 n=3	3~5年 n=4	6年以上 n=5
英 語	7	6	5	4	5	1	0	3	2
算 数	1	0	0	1	0	1	1	0	1
理 科	3	7	4	5	8	5	1	0	0
社 会 科	6	4	9	2	9	4	1	1	3
な し	0	1	1	0	0	0	0	0	0
分らない	0	0	1	0	0	0	0	0	0
無 記 入	1	0	0	0	0	0	0	0	0
計	18	18	20	12	22	11	3	4	6
複数回答	1	1	-	0	2	-	-	-	1
やさしい科目									
	小学校高学年			中 学 生			高 校 生		
	0~3年 n=17	3~5年 n=17	6年以上 n=20	0~3年 n=12	3~5年 n=20	6年以上 n=11	0~3年 n=3	3~5年 n=4	6年以上 n=5
英 語	2	1	6	1	0	4	0	0	0
算 数	14	17	16	11	20	7	2	4	3
理 科	0	0	2	0	1	0	1	0	1
社 会 科	0	0	1	0	0	1	0	0	1
な し	0	0	0	0	0	0	0	0	1
分らない	0	0	0	0	0	0	0	0	0
無 記 入	1	0	0	0	0	0	0	0	0
計	17	18	25	12	21	12	3	4	6
複数回答	-	1	5	-	1	1	-	-	1

滞米年数の長短によって各科目の難易の感じ方に差があるのかどうかを検討するため、小学校高学年、中学生、高校生を滞米年数別にまとめたのが表2-2である。やさしい科目として算数(数学)を挙げた圧倒的多数の者をみると、その滞在年数にはほとんど関係なく、いずれの滞在年数カテゴリーでも、算数(数学)をやさしい科目としてあげているものが一番多い。

それに対して英語をやさしい科目としあげたものの数は、滞在年数6年以上でそれより滞在年数が短いものに比べると、少し多くなっていることが見て取れる。理科社会についても同様である。もともと理科や社会は得意な科目であったが、渡米後短期間の内は英語が出来ないという理由で理科社会をむずかしいと感じていた者は、滞在期間が長くなるにつれて社会理科をやさしいと感じるようになるのではないかとということが、滞在期間6年以上の者に3名、3~5年の者の中に1名のものが、社

会理科をやさしいと答えていることから推測できる。しかし、英語をむずかしい科目としてあげている者の数も6年以上在籍の者の中になりに多く見られる。これは科目をむずかしいやさしいと感じることは、言語の問題のみが関係しているのではなく、好き嫌い、あるいは得意不得意が影響することも多いことによるのではないかと考えられる。渡米直後に英語能力が不十分という理由で英語がむずかしいと感じていた者は、英語ができるようになるにつれてむずかしい科目だと感じることは薄れていくであろうが、英語能力には関わらず、英語学習が好きでないまたは得意でないと感じる者にとっては、日常英語の上達と英語という学科をむずかしいと感じるかどは、別のことであるだろう。日本語を母語とする日本の生徒の中にも国語は苦手という者がいるのと同様であろう。理科社会が嫌い、または不得意と考えている者も同様である。滞米年数が長くなればなるほど、日常の

表3-1 英語のむずかしい点やさしい点

英語のむずかしい点		英語のやさしい点	
小学校高学年		小学校高学年	
有効回答数	46	有効回答数	44
むずかしい点はない	7	やさしい点はない	12
単語	11	スペリング	9
話す読む	7	書く	5
書く	6	楽な内容	4
文法	5	話す	4
発音	4	全般的に	3
スペリング	3	文法	2
宿題	2	読む	2
意味不明	1	アメリカ生まれ or 長期間在住	2
		教え方	1
中学生		中学生	
有効回答数	34	有効回答数	31
むずかしい点はない	4	やさしい点はない	12
単語	9	スペリング	6
発音	5	読む	3
書く	5	書く	3
文法	4	文法	3
話す・ディスカッション	3	話す	2
聞く	2	全般的に	2
読む	2		
高校生		高校生	
有効回答数	12	有効回答数	8
むずかしい点はない	1	やさしい点はない	4
内容が高度	5	敬語漢字がない	2
英語力	3	書く	2
単語	2		
教育体制	1		

註：受けていない、無記入、間違い回答などは除いた有効回答のみ

表3-2 算数(数学)のむずかしい点やさしい点

算数(数学)のむずかしい点		算数(数学)のやさしい点	
小学校高学年		小学校高学年	
有効回答数	49	有効回答数	50
むずかしい点はない	19	やさしい点はない	2
文章問題	16	既習だから	26
不得意分野	6	計算問題	13
日本のやり方教え方と異なる	5	全般的に	5
用語	3	得意分野	3
		教え方	1
中学生		中学生	
有効回答数	34	有効回答数	38
むずかしい点はない	14	やさしい点はない	3
文章	9	既習	22
用語	5	計算	5
苦手な部分	4	全般的に	5
全般的に	2	レベル別になっている	1
		英語をあまり使わない	1
		解けるとうれしい	1
高校生		高校生	
有効回答数	8	有効回答数	8
むずかしい点はない	2	やさしい点はない	3
文章問題	4	計算問題	2
テスト	1	既習・全般的に	2
システム	1	宿題	1

表3-3 理科のむずかしい点やさしい点

理科のむずかしい点		理科のやさしい点	
小学校高学年		小学校高学年	
有効回答数	43	有効回答数	39
むずかしい点はない	10	やさしい点はない	18
用語	16	実験	10
読み書きの問題	7	特定の分野	5
不得意分野	5	全般的に	4
苦手	3	教え方, 学び方	2
グループ学習	1		
全般的に	1		
中学生		中学生	
有効回答数	32	有効回答数	31
むずかしい点はない	8	やさしい点はない	17
用語	11	実験	5
全般的に	5	暗記	3
レポート(書く)	3	既習	2
不得意分野	3	計算問題	2
苦手	2	プロジェクト	1
		教科書を読むとき	1
高校生		高校生	
有効回答数	9	有効回答数	9
むずかしい点はない	32	やさしい点はない	4
全般的に	4	特定分野・課題	3
用語	1	全般的に	1
システム	1	教え方	1

表3-4 社会科のむずかしい点やさしい点

社会科のむずかしい点		社会科のやさしい点	
小学校高学年		小学校高学年	
有効回答数	39	有効回答数	36
むずかしい点はない	8	やさしい点はない	17
用語	8	興味のある事項・分野	9
背景知識がない	8	教え方	5
英語の問題	6	書く読む	3
特定分野	4	全般的に	1
全部・苦手	3	好きだから	1
レポート	2		
中学生		中学生	
有効回答数	30	有効回答数	29
むずかしい点はない	11	やさしい点はない	19
背景知識の不足	8	全般的	4
全般的に	5	暗記	3
英語力の問題	3	日本のこと	1
単語	3	リサーチ	1
		宿題	1
高校生		高校生	
有効回答数	10	有効回答数	7
むずかしい点はない	4	やさしい点はない	4
全般的に	3	全般的に	3
背景知識・立場	2		
教師の問題	1		

英語能力の影響よりも、得意不得意好き嫌いなどの理由によって、むずかしいと感じる科目を選ぶようになるのではないかと考えられる。

しかし、一般的な得意不得意、好き嫌いなどのような科目に対する捉え方以外に、科目によっては、外国人子弟にとっては、特有の困難点が存在することも考えられる。そこで、以下のような質問項目の分析を行った。

(1)-2 各教科の難易点およびその理由

“それぞれの科目のむずかしい点、その理由やさしい点と、そのわけを書いてください”という質問に対する自由記述の回答を、むずかしい点、やさしい点という観点からKJ法によって分類した。そのカテゴリー内に分類される回答数を表3-1～表3-4に示した。

以下、1科目ずつ、その科目をむずかしいと感じる点、その理由、やさしいと感じる点、その理由を見て行く。

(1)-2-1 英語

英語の授業でむずかしいと感じることがらについては、小学校高学年では単語が分からないことが一番多く挙げられており、また発音がむずかしくて読む話す容易でないこと、文法などの困難があり、書くこともむずかしいと感じていること、などが続いている。英語にむずかしいところはない、と明記している者7名のうち2名は、

「アメリカ人である」、「ここで生まれ育った」などと記入している。一方、“英語でやさしいところはどこですか”の質問に対しては、小学高学年の有効回答者44名のうち12名までが「(やさしいところは)ない」と答えているように、英語を母語として育った者以外の日本人子女は、現地校の多くの英語を母語とする生徒の中で、大きなハンディキャップを感じながら学習をしている。やさしいと感じるところを強いてあげるならば、スプリング学習のような単純部分であるということにも、英語を母語としない者の英語学習の困難を感じ取ることができる。

中学生においても同様な傾向で、単語の意味、発音や文法などに困難を感じる者が多く、また、「やさしいと感じるところなどはない」という者が一番多くを数えている。強いてやさしいと感じる点をあげるならばスプリングを挙げたものが最多であるという点も、小学校高学年と同様である。

ところが高校生になってくると、困難点としては内容が高度であるということが挙げられるようになってくる。高校の英語ともなると日常英語を越えた難解な英語学習も多く含まれてくる。参観したESLクラスにおいても古典の戯曲(シェークスピア)が教材として使用され、文章表現に関する専門用語が多用され、難解な英文を術

語を駆使しながら解説するという学習内容であった。ESLですらそのような内容であるから、普通クラスの英語においても教材や学習内容がどんどん高度になっていくことは想像に難くない。事実長年滞米し、ESLを終えて普通クラスに入っている生徒達が挙げた英語のむずかしい点としては、内容が高度であるというものが多くなっている。

英語の困難点として「英語力」という回答は滞米年数のあまり長くない生徒達から出されており、彼らは小学生中学生と同様、基本的な英語力の不足を感じているということであろう。

(1)－2－2 算数(数学)

算数(数学)については、前述のように一番やさしく感じる科目として多くの生徒から回答があった。小学校高学年においてむずかしく感じる点をたずねたところ、実に19名が「むずかしいことはない」と回答している。そして、むずかしい点をあげたものの中では文章問題をあげたものが16名で最多であり、その理由としては「その問題文の意味がわからない」であり、算数のむずかしい点というよりは英語力が十分でないことが算数学習の妨げになっているということなのである。

算数をやさしく感じる理由としては、有効回答の半数以上の圧倒的多数が「既習だから」と答えている。すでに日本にいたとき、または渡米してからも、日本人学校の算数の方が現地校の算数よりも進度が早いことにより日本語で教えられている。それを随分遅れて現地校で学ぶので、日本人学校在校生にとっては、すべてそれらは復習となり、やさしく感じるのである。具体的な記述としては「日本人学校で習ったことだから」「日本人学校の勉強の方が進んでいるから復習になる」「日本より進んでいないから」などのように回答されている。やさしく感じる点の次に多い回答は「計算問題」であり、その理由は「簡単だから」、「先に学んでいるから」、「日本のレベルとちがって簡単」、というような回答が並ぶ。

中学生の数学でやさしく感じる点については、「むずかしいところはない」が14名、「文章題」が9名であり、小学高学年の回答と同様な傾向である。

高校生の傾向については、全回答数が12と少ないので明確に言うことはできないが、むずかしい点については、有効回答数8のうち半数が「文章問題が困難である」としており、その理由として「英語だから」、「用語がむずかしい」などと答えている。またやさしい点については、高校生の数学になると有効回答数8の内3つの回答は「やさしいところはない」である。中学校までとは異なり、高校数学になると内容的にむずかしくなっており、単純な計算問題や既習で理解できていることはやさしく

感じるが、全般的に数学は苦手、むずかしいと感じる者が多くなっていることが伺える。

(1)－2－3 理科

理科でむずかしいと感じる点については、小学高学年では用語というのが最多である。読み書きに関連するところ、つまり英語の能力不足が困難点であるという答えも7名である。理科においては、特に日常生活用語とは異なるむずかしいレベルの、まったく日常生活には用いられることのないような語(梶田, 1997)が多く用いられる。これは日本語で理科を学ぶときにも同じことではあるが、日常英語を覚えていくことがやっとの段階にある海外子女にとっては、難解な用語が次々にでてくることにとまどいを覚えるであろう。さらにまだ十分な表現力が備わっていない彼らにとって、理科学習の中で記述したり発表したりする機会は、大変な困難である。一方英語のハンディの少ない長期滞在者で理科の得意な子どもにとっては「むずかしいことはない」という答えになりそれが10名、理科のうちでも不得意分野がむずかしい、あるいは理科は苦手、というものが9名と、この科目は小学校ですでにかなりの得意不得意意識がでてきている。やさしい点についての問には「やさしいことはない」が18名と、「むずかしいことはない」と感じる者の約倍数が、とにかくむずかしいと感じていることがわかる。敢えてやさしいところをあげれば「実験」が一番多いというも、言葉をあまり使うことなく、手順ののって具体的に言っていけばいいという、英語を使用しないですむところという発想であり、むずかしい点の裏返しへの回答傾向となっている。

中学生の回答も、小学生とほとんど同様な傾向である。やさしい点に計算、暗記、その他が入ってくるが、これも英語をあまり使用しないでもよいという点では同じである。

高校生では、回答数が少ない上に回答がバラバラで、一貫した傾向を抽出することは不可能である。高校になると科目の選択制が多く取り入れられているところから、理科を不得意とする者は理科の科目を選択していなかったり、得意な分野の科目のみを選択していて全体的にやさしいと感じていたりするということもあるだろう。

(1)－2－4 社会科

社会科でむずかしい点については、小学高学年では理科と同様に「用語」との答えが最多であり、「英語の問題」がそれに続く。これらの理由は理科の項で述べたことと基本的には同じであり、用語では特に地名や人名、そして術語を覚えるのがむずかしいとの記述が多くなされている。ついで多いのは「背景知識がない」に分類される回答である。物語や日常の生活の中で自然に身につ

いているこの国の歴史上の出来事についての知識、それらについての考え方、そしてこの国独自の社会制度や社会についての考え方とそれに関連する用語など、米国で生まれ育った者にとっては常識とされることが、日本人子女にとってはすべて新しいことだということが、社会科の学習を困難に感じさせることになっているようである。

一方で「やさしく感じる場所」には、「やさしいことはない」が17名と多く、また具体的にやさしく感じることは「興味のある事項・分野」という回答が多かったが、全般にむずかしく感じる中で、それぞれの個人が興味を持っていること、また日本で学んで得意とするところなどの部分部分においてホッとしながら、また気を取り直して社会科に取り組んでいる様子が感じられる。

中学生においては、「むずかしいところはない」という、おそらくアメリカ生まれまたは長期間在住者の回答について、「背景知識の不足」に分類できる回答が一番多くなっている。次第に内容的にむずかしくなるにつれて、単に単語や地名や用語の問題ではなく、背景知識がないこと、または物事を見るとき立場の違いが社会科の理解を妨げているという、日本人子女のアメリカ現地校における社会科学習の困難点が伺える。「アメリカのことばかりだから：皆は小学校の時からズーとくり返し学習している」「アメリカからの世界の見方になっている、アメリカが正しくなっている」のような記述は、このような気持ちを表したものであろう。

学習面まとめ

以上見てきたように、生徒達は色々なことを感じながら現地校の各教科の学習に取り組んでいる。各教科に関する難易感に影響する要因としては、滞在年数、英語能力、科目に対する得意不得意意識などがあげられる。

現地校と日本語学校の両立の困難は、高学年になるほど大きくなるという声も多く聞かれた。特に高校になると現地校での勉学のために時間が大幅に取られることの

他に、成績評価の方法が日本と大きく異なり、スポーツ、ボランティアなど課外活動が成績評価に組み込まれてくるため、そのような活動にとって重要な日である土曜日の補習授業校出席との間に葛藤が生じるようになる。現地校での高校生活を全うするためには、補習授業校との二重生活がむずかしくなってくるのである。さらに、補習授業校での高校教育は日本国内の大学進学には十分ではなく、そのため、現実的には高校進学の前に、日本の高校教育とアメリカでの高校教育のどちらかの選択を迫られるケースが多く、実際、父親の国内転勤に関係なく、日本国内の高校進学準備のための帰国による日本人学校からの転出生徒数は、毎年かなりの数に上る。中3の夏休み（アメリカの学年終了時）の転出者が多いということと、高校の在籍者が極端に少なくなるという補習授業校の現実が、それを物語っている。

言語面について

日本国内から父兄の転勤等にもなって海外に居住することになった日本人子女にとって、まず最初に直面する最大の困難点は言語である。表4-1に見るように、滞在期間0～3年の生徒であってもそのほとんどがESLと普通クラスの両方に籍を置くことになり、ESLクラスの設置されていない学校ではいきなり普通クラスのみで在籍することになる。普通クラスでは当然のことながら、先生が何を言っているのか分からない、周りの子ども達の言っていることが分からない、何をしたらいいのか分からないという状態が出現する。それはいくら柔軟性の高い子ども達だとは言っても、大変ストレスフルな状態であることには間違いない。

ある子は、「みんながいろいろ言ってくるけど何かよく分からなかった。先生の言うこともわかんなかったから、皆がやるのを見てやっていた。はじめはつらかった。3年、4年前半もいやだったけど、4年後半から分かってきた」（5年生男2年）と面接で語っている。そのほか、

表4-1 現地校での在籍クラス 人数 (%)

	滞在年数	ESLのみ	ESLと普通クラス	普通クラスのみ	計
小学高学年	0～3年	1 (6%)	14 (82%)	2 (12%)	17 (100%)
	3～5年		9 (53%)	8 (47%)	17 (100%)
	6年以上		2 (10%)	18 (90%)	20 (100%)
中学生	0～3年		11 (92%)	1 (8%)	12 (100%)
	3～5年		12 (60%)	8 (40%)	20 (100%)
	6年以上		0 (0%)	11 (100%)	11 (100%)
高校生	0～3年		2 (67%)	1 (33%)	3 (100%)
	3～5年		3 (75%)	1 (25%)	4 (100%)
	6年以上		1 (20%)	4 (80%)	5 (100%)

その時期の子ども達のことは、父兄の座談会での話の中に、多くの例を聞くことができた。「当初はお昼も食べない、おやつも食べないでずっと泣いてばかりの状態が毎日続いた。そのうちに黙って見ているようになり、約2ヶ月ぐらいかかってやっと慣れてきて『もうお迎えに来たの?』というようになった」(当時保育園男の母)。「2週間目位から気持ちが悪いと3日続けて早退、家に帰るとすぐに治る。4日目は行く前から気持ちが悪いというので一緒に学校へ行った。すぐに夏休みになったので何とか乗り越え、9月からはいやいやではあるが行くようになった。(約2年たった)今でも学校はいやいや。心から楽しいわけじゃなく出来れば休みたい。ときどき休みたいということがあり、休ませている」(当時小5男の母)。「半年ぐらいは学校へ行くのがいやだいやだということが多かった。学校で我慢してきて帰ってきてから爆発、『どうしてこんなところに私が来なくちゃいけないかったの』と泣いた。1年ぐらい、なんだかんだということが多かった」(当時小5女の母)。「3年2ヶ月たったが、この半年ぐらいでやっとこの生活に慣れてきた。最初の1年は、つれて帰ろうかなと思った。本当につらそうだった。よく泣いていた。ESLの先生に相談したけど、『ESLはアメリカで生活するための教育、英語に慣れるために家でも英語で話しかけてください』と言われ、こんなに英語を使いたくない子どものことを先生は分かってくれない。子どもをどう助けたいのか、と悩んだ」(当時5年生女の母)。「最初のころはお腹痛い、頭痛いで『学校に行きたくない』と言った。日本人が少なく、助けてくれる人がなかったので、母親が午前中2時間ぐらいヘルプという形で学校にすることにした。3ヶ月位続けるうちに、そのうち親が来るのを嫌がり始め(親にみんなの前で英語を話してほしくなくなった)、止めることが出来た。最初の3年間は現地校では静かで、ストレスを家に帰って発散、わがままの言い放題だった。失敗したなと思ってますけど」(当時小2男の母)。「母親の袖をつかんで話さないでふるえてる。3週間ぐらい毎日一緒に行った。しょっちゅう後ろをふりかえって、母が外に出ようとするともものすごい勢いで捕まえに来る『お母さん!』と」(当時プレスクール男)。などのように、渡米当初の子ども達と母親の格闘の様子が口々に語られた。

そのようなストレスフルな状況の中で、子ども達の中には情緒的に不安定な状態を出現させる子どもも少なくない。「寂しがるので猫を飼ったが、手荒くいじることがある。気持ちのパロメーターになっている」(当時小6女の母)のような話が聞かれた。また、質問紙への回答のなかにも、アメリカに来てからの自己の変化として、

「ちょっとだけぼうりょくをふる(ママ)ようになった」(小4男)、「弟をいじめる」(小4男)、「こんじょうなし」(中2男)というのがあるが、彼らの自分自身にも意識できるほどの行動の変化は、そのような情緒不安定状態の一つの表現形かもしれない。もちろんそれらの状態は、単に言語(英語)の問題だけではなく、急に住環境の大きな変化があったこと、それまで仲良くしてきた友人との急な別離など他の多くの要因も加わっているであろうが、大きな環境の変化に加えて、周囲で話されている言葉がわからない状況の中で一日の大半を過ごさなければならぬ渡米直後の子ども達の不安感は、想像に余りある。

以上のような困難と不安に満ちた期間が過ぎ、次第に第2言語の獲得も進んでくるが、英語の獲得もそう簡単に来るものでもない。「うちの子は早く溶け込もうという気持ちはなかったの、気持ちの上ではよかったが、英語を取り入れるのは遅れた、だから英語力に関しては厳しい状況。ESLもないところだったので、学校でケアをしてくれず、親とチューターでやるしかなかった」(当時小1女の母)。また、渡米後年年数を経ても、「3才で来て、今1年生、英語は分かっているようでも細かな感情の表現は出来ない。昨日も迎えに行くと先生が、『黙り込んで貝になってしまった』と。またかと思った。グループで物事を進める授業で子ども達同士うまくつたえられないとイライラしてしまって、どうしていいか分からず黙ってしまうみたい。性格的な面もあると思うけど。4年目でもまだまだ。家の中では子どもが一番出来るんだけど、でもまだまだ細かいことは言えない」(小1男の母)。「仲良く遊んでいる分にはいいが、何かが起こったときにちゃんと言えない。微妙なことが言えない」(小2男の母)。

子ども達への面接においても、「はじめはよくお父さんに『なんでここに連れてきたの』と怒った。自分は積極的でないので英語が上手くならない。それに行動や考え方がちがう」(高1男、2年目)。「ちゃんと言えないので恥ずかしくなる。英語もできないと思われるのは悔しい。でもアメリカ人とは違うと感じる」(中3、半年目)など、英語との格闘はずっと継続していることが語られた。

質問紙の回答に見る英語力の自己評価では、滞米3年以上になると高校生の「書く」の50%を除いては、ほとんどの学年層、ほとんどの項目で90%以上または90%に近い数のものが、よくできる・だいたいできるの答えをしている(表4-2)。そして、日本語と英語ではどちらが得意かという質問では、滞在年数が長くなるほど、特に6年以上になってくると英語の方が得意という者の

比率が高くなって来ている（表4-3）。

次に現地校における英語の能力についての自己評価をみると（表4-4）、休み時間に友達が話している英語がどれくらい分かるか、授業中先生の話していることがどれくらい分かるか、という質問に対しては、滞米3年以下であってもよく分かる・だいたい分かるが、あまり分からない、ほとんど分からないを上回っており、3年以上になると、あまり分からない、ほとんど分からない、は皆無となっている。

また、自分の考えを英語で発表できるか、レポートや

作文がどの程度自由に書けるか、の各質問に対しては、滞米3年以下では、あまりできない、ほとんどできないの方がよくできる・だいたいできるを大幅に上回り、3年以上になってもあまりできないという回答が相当数あり、ほとんど書けないの回答も皆無ではない。この回答結果から、だいたい3年以内にはある程度の英語力が身につけてきて英語力に関する自己評価も高くなってくるが、「聞く・話す」と比較すると「読む・書く」が十分できるようになったと感じるには長期間を要するようである。

表4-2 英語力・日本語力に関する自己評価 人数（%）

		英語力の自己評価								無回答	計
		良くできる・だいたいできる				あまりできない・ほとんどできない					
		話す	聞く	読む	書く	話す	聞く	読む	書く		
小学高学年	0～3年	5(29%)	10(59%)	9(53%)	8(47%)	11(65%)	6(35%)	7(41%)	8(47%)	1	17
	3～5年	17(100%)	17(100%)	15(88%)	17(100%)	0	0	2(12%)	0		17
	6年以上	18(90%)	18(90%)	18(90%)	17(85%)	1(5%)	1(5%)	1(5%)	2(10%)	1	20
中学生	0～3年	4(33%)	7(58%)	3(25%)	3(25%)	7(58%)	4(33%)	8(67%)	8(67%)	1	12
	3～5年	18(90%)	20(100%)	18(90%)	18(90%)	2(10%)	0	2(10%)	2(10%)		20
	6年以上	11(100%)	11(100%)	11(100%)	11(100%)	0	0	0	0		11
高校生	0～3年	1(33%)	2(67%)	2(67%)	2(67%)	2(67%)	1(33%)	1(33%)	1(33%)		3
	3～5年	4(100%)	4(100%)	4(100%)	2(50%)	0	0	0	2(50%)		4
	6年以上	5(100%)	5(100%)	5(100%)	5(100%)	0	0	0	0		5
		日本語力の自己評価								無回答	計
		良くできる・だいたいできる				あまりできない・ほとんどできない					
		話す	聞く	読む	書く	話す	聞く	読む	書く		
小学高学年	0～3年	16(94%)	16(94%)	16(94%)	15(88%)	0	0	0	1(6%)	1	17
	3～5年	17(100%)	17(100%)	16(94%)	17(100%)	0	0	1(6%)	0	1	17
	6年以上	18(90%)	19(95%)	16(80%)	15(75%)	1(5%)	0	3(15%)	4(20%)	1	20
中学生	0～3年	11(92%)	11(92%)	11(92%)	11(92%)	0	0	0	0		12
	3～5年	20(100%)	20(100%)	20(100%)	20(100%)	0	0	0	0		20
	6年以上	11(100%)	11(100%)	10(91%)	11(100%)	0	0	0	0		11
高校生	0～3年	3(100%)	3(100%)	3(100%)	3(100%)	0	0	1(33%)	0		3
	3～5年	4(100%)	4(100%)	4(100%)	4(100%)	0	0	0	0		4
	6年以上	5(100%)	5(100%)	5(100%)	4(80%)	0	0	0	1(20%)		5

表4-3 日本語と英語ではどちらが得意か 人数（%）

		話す・聞く			読む・書く			無回答	計
		日本語	同じくらい	英語	日本語	同じくらい	英語		
小学高学年	0～3年	14(82%)	2(12%)	0	14(82%)	2(12%)	0	1	17
	3～5年	10(59%)	5(29%)	2(12%)	9(53%)	7(41%)	1(6%)		17
	6年以上	4(20%)	6(30%)	9(45%)	2(10%)	8(40%)	9(45%)	1	20
中学生	0～3年	11(92%)	0	0	11(92%)	0	0	1	12
	3～5年	16(80%)	4(40%)	0	16(80%)	4(40%)	0		20
	6年以上	2(18%)	2(18%)	7(64%)	2(18%)	1(9%)	8(73%)		11
高校生	0～3年	2(67%)	0	1(33%)	2(67%)	1(33%)	0		3
	3～5年	4(100%)	0	0	4(100%)	0	0		4
	6年以上	1(20%)	3(60%)	1(20%)	1(20%)	2(40%)	2(40%)		5

表4-4 現地校における英語能力（聞く話す書く）自己評価 人数（％）

休み時間に友達が話している英語がどれくらいわかるか							
		よくわかる	だいたい分かる	あまり分からない	ほとんど分からない	無回答	計
小学高学年	0～3年	4 (24%)	7 (41%)	4 (24%)	1 (6%)	1	17
	3～5年	14 (82%)	3 (18%)	0	0		17
	6年以上	18 (90%)	1 (5%)	0	0	1	20
中学生	0～3年	2 (17%)	7 (58%)	2 (17%)	0	1	12
	3～5年	14 (70%)	(30%)	0	0		20
	6年以上	11 (100%)	0	0	0		11
高校生	0～3年	1 (33%)	0	1 (33%)	0	1	3
	3～5年	3 (75%)	1 (25%)	0	0		4
	6年以上	4 (80%)	0	0	0	1	5
授業中、先生の話していることがどれくらい分かるか							
		よくわかる	だいたい分かる	あまり分からない	ほとんど分からない	無回答	計
小学高学年	0～3年	3 (18%)	7 (41%)	6 (32%)	0	1	17
	3～5年	14 (82%)	3 (18%)	0	0		17
	6年以上	11 (55%)	7 (35%)	1 (5%)	0	1	20
中学生	0～3年	3 (25%)	5 (42%)	3 (25%)	0	1	12
	3～5年	9 (45%)	11 (55%)	0	0		20
	6年以上	11 (100%)	0	0	0		11
高校生	0～3年	1 (33%)	1 (33%)	1 (33%)	0		3
	3～5年	1 (25%)	3 (75%)	0	0		4
	6年以上	4 (100%)	0	0	0	1	5
授業中に自分の考えを英語で発表できるか							
		よくできる	だいたいできる	あまりできない	ほとんどできない	無回答	計
小学高学年	0～3年	0	4 (24%)	8 (48%)	4 (24%)	1	17
	3～5年	7 (41%)	8 (47%)	2 (12%)	0		17
	6年以上	13 (65%)	5 (25%)	1 (5%)	0	1	20
中学生	0～3年	0	2 (17%)	6 (50%)	2 (17%)	2	12
	3～5年	2 (10%)	8 (40%)	9 (45%)	1 (5%)		20
	6年以上	9 (82%)	2 (18%)	0	0		11
高校生	0～3年	0	2 (67%)	0	1 (33%)		3
	3～5年	0	2 (50%)	1 (25%)	1 (25%)		4
	6年以上	4 (80%)	0	0	0	1	5
レポートや作文がどの程度自由に書けるか							
		自由に書ける	だいたい書ける	あまり書けない	ほとんど書けない	無回答	計
小学高学年	0～3年	2 (12%)	3 (18%)	7 (41%)	4 (24%)	1	17
	3～5年	2 (12%)	15 (88%)	0	0		17
	6年以上	11 (55%)	7 (35%)	0	1 (10%)	1	20
中学生	0～3年	0	5 (47%)	6 (50%)	0	1	12
	3～5年	5 (25%)	12 (60%)	3 (15%)	0		20
	6年以上	9 (82%)	2 (18%)	0	0		11
高校生	0～3年	0	2 (67%)	1 (33%)	0		3
	3～5年	0	3 (75%)	1 (25%)	0		4
	6年以上	4 (80%)	0	0	0	1	5

表4-5 家庭内での使用言語 人数

滞在年数	親からの言葉				親への言葉				きょうだいの会話					計	
	日本語	英語	半々	無答	日本語	英語	半々	無答	日本語	英語	半々	無兄弟	無答		
小学高学年	0～3年	16		(1)	1	16		1	1	14	1	1		1	17
	3～5年	15		2		16		1		11		5	1		17
	6年以上	12		7	1	11		8	1	5	7	4	3	1	20
中学生	0～3年	10			2	11			1	10			1	1	12
	3～5年	20				19		1		18		1	1		20
	6年以上	8		3(1)		8		3(1)		3	5	2	1		11
高校生	0～3年	3				3				2		1			3
	3～5年	4				4				4					4
	6年以上	4		1		4		1		3		1	1		5

() 内は英語と他言語とが半々 (例: 仏語・ペルシャ語)

表4-6 場面による日本語英語の使用頻度

	滞在年数	夢を見る時				数を数える時				びっくりした時				けんかの時				家族と食事				計
		日語	英語	半々	無	日語	英語	半々	無	日語	英語	半々	無	日語	英語	半々	無	日語	英語	半々	無	
小学高学年	0～3年	13	0	3	1	8	1	7	1	11	2	3	1	11	1	4	1	15	0	1	1	17
	3～5年	9	1	7		6	1	10		5	1	11		6	3	8		14	0	3		17
	6年以上	3	4	12	1	9	2	8	1	7	4	8	1	5	5	9	1	11	0	8	1	20
中学生	0～3年	9	0	2	1	6	0	5	5	7	1	3	1	7	0	4	1	11	0	0	1	12
	3～5年	14	0	5	1	13	1	6		7	3	9	1	11	3	6		19	0	1		20
	6年以上	2	1	7	1	2	3	6		0	5	6		1	6	4		7	0	4		11
高校生	0～3年	2	0	0	1	3	0	0		2	1	0		2	0	0	1	3	0	0		3
	3～5年	2	0	2		3	0	1		2	0	2		4	0	0		4	0	0		4
	6年以上	1	0	3		1	2	2		0	1	4		2	0	3		3	0	2		5

註: 日語は日本語, 無は無回答を示す

現地校での学習場面を離れて日常生活においても、滞在年数が長くなってくると、少しずつではあるが家庭内でも英語を使うものの数が多くなってくる。親との会話は、片親が日本人ではない場合を除いてはほとんどが日本語が使用されているが、きょうだい間では英語で話す、または英語と日本語半々という数が漸増している(表4-5)。

これは、滞在期間の長さに伴う子ども達の現地化(梶田・佐藤, 1999)が、ポートランド補習授業校の生徒達の中にも進んでいることのあらわれと見ることができるだろう。特定の場面などで英語、日本語のどちらを使用するかという質問(表4-6)の答えにも、滞在年数が長くなるにつれて日本語と英語が半々、または英語と答える比率が高くなっている。滞在期間が長くなってくると、圧倒的長時間を英語環境の中で過ごす彼らの頭の中には英語の回路もしっかりと形成されて日本語回路と英語回路の両方が存在しており、家族と一緒に食事場面などでは意識して日本語回路を使用するが、とっさの場合には、そのときによりどちらが先にでてくるかは半々になってきたり、やがては英語が先に出てくるようにもな

るのであろう。言語における現地化が進んでいくのである。ポートランド補習授業校においても、梶田・佐藤(1999)の報告と同様な傾向が見られた。

アイデンティティ面について

学習面においても言語面においても多くの困難に直面しながら、時間をかけてそれらを克服しつつ現地校やアメリカ社会に適応して行っている子ども達であるが、彼らは、このような子供時代に外国生活をするようになった自己の境遇をどのように感じているのだろうか。また、自己の置かれた生活環境や、その中で生活している自己自身をどのように見ているのだろうか。

まず、「日本からアメリカに来て(生まれて)一番よかったことはどんなことですか」、「日本からアメリカに来て(生まれて)一番よくなかったことはどんなことですか」の質問に対する回答を見る(表5-1)。よかったことでは、「英語が話せるようになった」、「英語が使えるようになった」というような英語に関する記述が最多であり、次いで「家が広い」、「自然が豊かである」などの環境条件がよいこと、「交友関係が広がった」、「考

表5-1 アメリカに来て（生まれて）よかったと思うこと、よくなかったと思うこと

	小学校高学年 n=54	中学生 n=43	高校生 n=12	合計 n=109
よかったと思うこと				
英語	16	14	3	33
新しい経験とその機会	11	2	3	16
環境条件（自然、家）	7	7	2	16
考え方	1	7	1	9
交友関係の広がり	6	7	—	13
その他	3	6	—	9
ない	3	1	1	5
わからない・記入なし	7	2	2	11
	54	46	12	112
よくなかったと思うこと				
日本の友人から離れた	7	5	1	13
日本・日本人（物）から離れたこと	5	3	—	8
日本についての知識・日本の学校の勉強のおくれ	7	7	3	17
英語にまつわる困難	7	4	4	15
二つの学校	2	6	—	8
環境条件から来るあそびにくさ	5	7	—	12
その他	7	7	3	17
ない	5	6	1	12
わからない・記入なし	9	4	—	13
	54	49	12	115

註：回答数と人数の不一致は、中学生に複数回答者があったため

え方が変わった」などの自己の経験の広がり、が続いている。

よくなかったことは大きく二つに分けることができる。その一つは、日本から離れたこと、日本についての情報が入りにくく知識不足や日本の勉強が遅れることになること、日本の友人と離れたことなどのように、国内にいれば日本人として普通に身につける部分が、自然に欠けてくることへの不安や心配と、友人と離れたさびしさである。二つめは、英語にまつわる困難、現地校と補習授業校の二つの学校へ通わなければならないという二重学校生活が負担であり大変だということ、環境条件から日本国内でのように自分で自由に遊びに行くことが出来ないという不自由さなど、この環境での生活の大変さ、困難が挙げられている。これらの記述は、現在の生活スタイルを彼ら自身がどのように感じているのかを反映している。

日本国内とは異なった環境の中で異なった生活スタイルで暮らし始めた子ども達は、そのような中での自らの変化についてはどのように感じているのだろうか。「アメリカに来てからのあなたは日本にいたときのあなたとは変わったと思いますか」に対する回答を見る。表5-2のように、「変わっていない」、または「分から

ない」と回答した者21名（22%）を除いて73名（78%）が「変わった」と回答している。この回答の滞在年数による違いはあまりみられなかった。

補習校生徒の約8割は、滞米生活によって、自分自身がそれまでの自己とは異なった側面を持つようになったと感じている。これからアイデンティティを確立していく時期にある生徒達にとって、この異文化移動の経験による自己の変化は、アイデンティティ形成の上で大きな影響力を持っていることは間違いないだろう。

また「変わった人はどんなところが変わりましたか」に対する回答は表5-3のとおりである。37.7%の回答が性格・行動が変わったというものであり、ついで20.5%が英語が話せる（できる）ようになったというものである。日本国内にいたときの自分とは性格的に異なった部分を持っていたり、行動の仕方が違う自分があり、そして何と言っても普通の国内にいる日本人よりはずっとずっと英語が出来る。それらを認識した上で自己はこういう人間だとアイデンティティの確認をするとき、それは日本国内にそのままいて形成されたときのアイデンティティとはかなり異なったものになるであろうことは容易に推測することができる。

子ども達は、普通の日本人が経験できない生活環境に

ポートランド日本語補習授業校の子ども達の異文化適応

表5-2 アメリカに来てからの自己の変化

学 年	変わった程度	回答人数	合 計	滞在年数別回答人数			
				3年未満	3～5年	6年～	不 明
小 4	すごく変わった	7		3	3	1	
	少し変わった	8		4	2	2	
	変わっていない	2		0	1	1	
	わからない・おぼえていない	0	17				
小 5	すごく変わった	4		1	3	0	
	少し変わった	2		1	0	1	
	変わっていない	6		3	3	0	
	わからない・おぼえていない	0	12				
小 6	すごく変わった	10		5	1	4	
	少し変わった	4		0	4	0	
	変わっていない	2		1	1	0	
	わからない・おぼえていない	0	16				
中 1	すごく変わった	7		2	5	0	
	少し変わった	5		1	4	0	
	変わっていない	3		1	2	0	
	わからない・おぼえていない	1	16				1
中 2	すごく変わった	5		1	2	1	1
	少し変わった	2		0	2	0	
	変わっていない	4		1	1	2	
	わからない・おぼえていない	1	12				1
中 3	すごく変わった	7		1	4	2	
	少し変わった	3		1	2	0	
	変わっていない	2		1	0	1	
	わからない・おぼえていない	0	12				
高校生	すごく変わった	5		1	2	2	
	少し変わった	4		2	2	0	
	変わっていない	0		0	0	0	
	わからない・おぼえていない	0	9				
全生徒数	すごく変わった	46		15	21	10	
	少し変わった	27		9	15	3	
	変わっていない	19		7	8	4	
	わからない・おぼえていない	2	94	0	0	2	2

註：有効回答94名：アメリカ生まれ15名を除いたため

表5-3 渡米後の自己の変化

全回答人数	94人
変わっていない, わからない	21人
変わった	73人
その回答数合計 (複数回答者多数)	146個
変化の具体的内容	記述数 (%)
性格が変わった・行動の仕方が変わった	56 (38.4)
英語が話せる (できる) ようになったこと	30 (20.5)
考え方の変化	15 (10.3)
勉強の仕方, 時間等の変化	11 (7.5)
好みの変化	10 (6.8)
服装, 外見	8 (5.5)
友達関係の変化	6 (4.1)
言葉 (日本語) が変わった (例えば関西弁→標準語)	3 (2.1)
何が変わったがよくわからない。すべてが変わった	7 (4.8)
	146

あることの長所を認識しつつも、そのような環境の中で生活することによって、日本人としてとすれば欠けてしまう部分があるということも感じつつ生活している。その、日本人としてとすれば欠けてしまう部分を出来るだけ少なくする機能を担う最大のものの一つが、補習授業校（日本人学校）である。補習授業校は、日本語と日本文化がいっぱいにつまったミニ日本社会である。そこは日本語による、日本の学習要領にもとづいた科目教育が行うための場であるのだが、その目的の他に、子ども達の心理的な側面に働きかける機能は、計り知れないほど大きい。その一つは、現地校でまだ言葉が上手く使えない子どもが、土曜日の補習授業校に来て日本語で自由に話すことが出来ることによって救われるという、癒しの機能である。そして二つ目は、アイデンティティ確認の場としての機能である。現地校に慣れ、アメリカ生活にも慣れてきて現地校での困難が少なくなってきた、補習授業校での日本人の友人との交流、日本語による日本に関する情報交換は、彼らにとって大切な生活の一部である。補習授業校の放課の際にはゲームの貸し借り、マンガ本の貸し借り、日本の芸能ニュースについてのおしゃべりなどが盛んに行われており、授業が終わっても1時間ぐらいは食堂ホールでおしゃべりに余念がなく、なかなか帰ろうとしない子どもたち（迎えの父兄も同様であるが）の姿が印象的であった。特に、日本人の少ない現地校に通う生徒にとっては、補習授業校での日本人の友人との交流は、自己が日本人であることを確認する上で重要な機能をになっているといえるだろう。アメリカの大学に進学することに決め、日本語での補習授業校の学習が必ずしももう必要ではなく、またサークル活動などのために土曜日の補習校の授業に間に合う時間に登校することが不可能な状況になっても、友人に会うために、たとえ授業が終わるところになってもやってくるという高校生（高2男）の例からもそのことを伺い知ることが出来る。

しかし一方で、子ども達の中にアメリカ化の希望が強くなった場合、父兄の日本語日本文化へのこだわりの間で、補習校授業に対する反発のかたちで情緒不安定が起る場合もある。特に永住予定者において、このようなことがしばしば見られるとのことである。父兄に言われて補習校に通ってはいいたものの、成長にともなって本人の意識が現地化していけば行くほど、なぜ土曜日にまで学校へ行かねばならないのか、どうして将来使わない日本語を勉強しなければならないのか、という疑問が強くなっていく子どももいる。そしてそれは、補習学校の授業への反発、教師への反発の様な形で出て来、補習学校へ出てきても授業への熱意がなかったり、教師に対

して口をきかなかったりというような形もあるとのことである。また、家庭において親子対立の原因になることもあるかもしれない。子ども自身が「必要ない、行きたくない」と補習校をやめてしまったが、そのことが残念だと、そのアイデンティティの方向性に必ずしも満足していない父兄もある（補習授業校教師談）とのことである。

このような個人によって色々な問題を抱えながら、補習校に通う多くの子ども達は、現地校と補習校という二重教育環境のなかで葛藤しながら、自分の置かれた環境を感じ取り、自らのアイデンティティを模索していくのである。彼らは日本人学校において日本語と日本的な社会のルールを学び、保ち続け、現地校において英語と米国社会のルールを学び、それを身につけ、バイリンガルだけではなく、バイカルチュアルとして育てている。そのためには他の人が遊んでいる土曜日に、日本の勉強と日本文化を身につけるための場所（補習授業校）へ行って一定の時間を過ごし、現地校と補習授業校との二重の学校生活を送るという、精神的にも身体的にも負担の大きい生活を継続しているわけだが、補習授業校に通学する生徒達、及び父兄達の多くはそれを望んでおり、バイリンガル、バイカルチュアルとして成長していく自らの境遇をポジティブにとらえ、またはポジティブにとらえようと努力をしつつある。

そのような生徒達の声を面接で聞くことが出来た。「日本人の友達とアメリカ人の友達とは感じ方が違う。そういうのがどっちでも大丈夫だからプラスかなあと思う。大人になっても他人の気持ちを理解できる人になりたい」（中2女）。「英語が出来ることはよかった。英語の分からない人の手助けができるような仕事をしたい」（中3女A）。「視野が広がった両方の文化が分かるので、両方の気持ちが理解できる。客観的な見方も出来るようになった」（中3女B）。「将来は役者になりたいんだけど、いろんなアジア人やヒスパニックなどにつき合った経験があり、役者としてそういう役を演じたいと思う」（中3女C）。「国際的な仕事が出来るんじゃないかと思う」（中3女D）。日本語と英語の両方が話せるようになったことはよかった（高1男）などの言葉にあらわれているように、このような環境に暮らし、そのなかで経験したことや語学能力を自らの長所として捉え、将来につなげようと考えている者が多いようである。

また、他国で生活をするという経験をするることによって、日本国内にいたときと比較して、日本という国に対する考え方が変化したというものも少なくない。質問紙の“アメリカに来てから、あなたの、日本についての考えが変わりましたか”に対する回答では、アメリカ

表6 日本についての考え方の変化 n=60 (複数回答)

日本 (日本人) のよいところ認識	15人	21叙述
日本 (日本人) のよくないところ認識	26人	47叙述
日本 (人) とアメリカ (人) の違い認識	23人	35叙述
日本に対する感じ方の変化	9人	9叙述
日本に帰りたい, 日本にあこがれる	3人	4叙述
アメリカがすき, アメリカに住みたい	3人	6叙述
その他 (不適切回答, 意味不明)	2人	2叙述
		124叙述

生まれを除いた94人中60人から124個の叙述が得られた(表6)。

一番多かったのが、日本社会、学校の否定的な側面への言及であった。例えば、「日本はせまいと思った」(6年男1.5年間)、「日本の空気はきたなすぎる」(中1女3年間)、「日本はもっと自然を守らなければいけない」(6年女3年間)、「日本は心も土地もせまい」(中3男1.5年間)、「個性がない」(高2女6年間)、「日本人みんなかっこわるい」(中2男9年間)、「物価が高い」(5年男3年間)、「日本の勉強はきびしい」(4年女5ヶ月間)、「学校の校則がきびしすぎる」(中2女1.5年間)、「陰険な人が多い」(中3女2年間)などである。その一方で、日本や日本人に対する新たな、肯定的な認識も生まれている。例えば、「日本のご飯がおいしい!」(6年女4年間)、「日本せい品(ママ)はすばらしい」(中1男3年間)、「日本人は、ぎょうぎが良いと、改めて思った」(中1女3年間)、「日本の製品の良さ」(中3女3年間)、「日本は結構有名だということ」(中1女4ヶ月間)などのようなものである。また、良否の判断はさておいて、社会のシステムや考え方などが異なることに気がついたという叙述も多かった。例えば、「第二次世界大戦の考え方」(4年男1.5年間)、「日本は日本人しかいないけど、アメリカは色々な人がいること」(4年女2年間)、「日本は小さい国だったんだと気付いた」(4年女1.5年間)、「日本の人は細い(註:細かい?), こっちの人はEasy」(4年女1.5年間)、「日本の人の考え方(ほとんどの人がネガティブで、アメリカ人みたかった事をびしばし言わない所など)」(中1女2.5年間)、等である。

これらの日本に対する捉え方考え方の変化は、いずれも、両方の社会を見、両方のシステムを見た結果生じたものである。「日本人はアメリカに住む人(外人)とは色々考え方や行動がちがうということ。自分を考えさせられた」(中2女3年間)、「日本の良いところと悪いところを客観的に見ることができる」(中3女3年間)、などのように、他国に住むことによって多くの情報を得、それらを総合してより客観的に日本を見ようとする態度

ができるならば、それは将来を担う子ども達にとって大変に有用なことであろう。

そのようにして日本を距離をおいたところから見た結果、それまでに持っていた日本に対する感じ方が変化した者も少なくない。中には、「日本が自分にとって外国のように思える」(小4男7年間)のような感じ方の変化もあるが、「日本が一番自分に住むにはいい所だということ」(5年女3年間)、「より日本を好きになった」(中1女2年間)、「日本がとても便利で、おちつくところだということを知った」(中2女3年間)、「日本文化に誇りを持てる」(中3女3年間)、「自分の国だから、誇りが高くなった」(中3女3年間)、「自分の大切な祖国だということが実感できる様になった」(高1男4年間)、というような、日本人としての自覚が生まれていることは、アイデンティティ確立が大きな課題となる思春期から青年期にさしかろうとしている年令の子ども達にとっては大きなことである。

これらの自己の変化、日本に対する見方の変化等を内に秘めながら、各々の生徒はある年令、ある時期に達したとき、今後をどのように生きていくかを考えるなければならない。特に前述したように、高校進学、大学選択の際にはその問題がクローズアップされる。日本の高校、大学、またアメリカの高校、日本の大学への帰国子女枠での入学、そしてアメリカの高校、大学など、いろいろな選択肢があるだけに、その選択が大きな問題となって突きつけられる。これは単にどのような学校で学ぶかということのみにとどまらず、異文化圏において両方の教育を受けた経験を経て、自己の変化も感じ、また日本や日本文化に対する見方も変化した上で、子ども達本人が、将来どのように生きるのか、何をして行くのかという、生き方の選択ともいえるのである。

3. 子女教育に関する父兄の悩み

これまで見てきたように、子ども達は子ども達なりに様々な経験をし、その中で苦勞もしながら成長をしているが、その過程をいちばん密接に分かち合っているのは、父兄である。子ども達をどのように育てたいと考えるのか、それに伴って異文化環境の中で父兄は子供達に何を学ばせたいと考えるのか、また子ども達自身はどう感じているのか、考えるべきことは沢山ある。与えられた環境条件の中で、子どもたちの学習環境選択の範囲はおおざと定まってくるが、その中から何をどう選択していくのか、そのような学習環境で学ぶことの長所は何か、短所は何か、また選択した学習環境の中で子ども達は実際にどのように学習して行くのか、困難点は何なのか等、海外子女とその父兄達はどのような学習環境を選択して

も、常にその問題に直面する。

ここでは、子どもが現地校になじむまでの苦勞、学力面での心配とケア、そして進路のことまで、異文化の中で一緒に落ち着かない時間を過ごしている母親の気持ちを、座談会、面接の記録からまとめてみたい。なお、座談会の出席者はすべてが駐在員家族であり永住予定者は含まれていなかったため、座談会での発言はすべて帰国を前提とした駐在員家族の立場からの発言であることをお断りしておく。

言語の項に前述したように、渡米後しばらくは、急激な生活環境の変化と、英語がわからないこと、システムの異なる学校生活への不安など、自らの不安を抱きながらもまずは子ども達のこと、と出来るだけ早く現地校になじむように、親としてどう対処したらよいかと心を砕き、時には何度も学校へ出向いたりして子どもの学校適応を助けて行かなくてはならない。そして数ヶ月ないしは数年を経て、我が子が現地校になじみ、学校生活にあまり問題がなくなってくると、今度はいつ来るか分からない帰国の時に備えて、帰国したときに困らないようにと、今度は帰国後の準備を念頭に置いた教育、しつけに関心が高くなる。それらの揺れる父兄の気持ちを、座談会記録から抜き出してみる。

しつけや勉強面、両方に向けてプレッシャー

「こっちに来たらとにかくこっちに慣れなさい、と。そしてある程度すると、日本に帰るんだからと、言うことが変わる… (Mさん)。「子ども達が翻弄されている部分がある。翻弄している張本人は親だけど。中略。あとのことで苦勞させないようにといろんなことを押しつけてしまっている部分があるんじゃないか。苦勞させないようにといろんなことを押しつけて、苦勞させている」(Sさん)。「いつ帰るかぜんぜん分からない。根無し草の生活。いつ何を言われても対処出来るようにしとかなくちゃいけない。こちらの生活も楽しんでもらいたいとは思うけど、でも勉強ちゃんとやらしてもらわなくちゃ、帰ったとき困る。日本に帰ったときに勉強困らないようにということで余計なプレッシャーを子どもに与えてしまうことが多い。先のことが予測できないからそれで親の方も大変 (Kさん)。「こちらで生活しているにもかかわらず、必ず頭の半分は日本を考えている。『日本に帰ったら、この子はやっていけるのかどうか』と。息子はここでのびのびと気持ちのいい生活をしている。親としてはそれだけじゃ困る。それでいいじゃないの、とそう見てあげたい。だけど、頭の半分ではいつも彼を日本に引き戻している。『日本では今のあなたの状態ではいけないの』、とか『あなたのこの態度は日本じゃ通用しないの』とかね。いつ帰っても適応できるように

しておいてあげるのが親の役目と思っている。だから一般の生活していながら two way で… そのところが親として心苦しい (Sさん)。「生活習慣、立ち居振る舞いなど日本では許されないことをやっていることがある。それでいいんだを思っちゃうと日本に帰ってからこまるので、ちゃんと言い聞かせておく。テーブルに足を乗せる、ドアを足で開けるなど」(Hさん)。など、親として矛盾した態度をとらざるを得ないことがしばしばあり、それが苦しいという声が聞かれた。

帰国の時期、教育の場

「この子にとってどこが一番いいのかわからない。私たちだけで帰るか。いろいろな可能性がある。日本へ帰ったら帰ったでこんどはどんな学校がいいかとか、通える範囲内なのかとか、子どもがなじめるだろうかとか、混沌として、こんな悩みですとお話できないくらい本当にもうくちゃくちゃな状態なので…」(Mさん)。「いつ帰ったらいいか、本当に問題。高校1年の9月までは受け入れてくれるけど (註：日本の高校への編入のこと)… 2年でも受け入れてほしい」(Wさん)。「高校終わるまでこちらにいられるという保証もないので、中途半端な時期に帰国しなくてはならないとすれば高校入学のときに帰った方がと…」(Nさん)。「やがて元の学校にもどる。子どもが、友達から聞いて、私は笛も吹けないし、跳び箱も跳べないし、社会もやってないし、と心配している。やっぱり日本の学校へ帰ることが一番心配。」(Wさん)などの声が聞かれた。最終的には日本に帰る駐在員家族としては、いつ転勤命令が来るか分からない状態の中で、子ども達が中途半端な時期に日本に帰らなくてはならないことになったら大変、それなら先に子どもだけでも先に帰った方がいいのか、もう少し待つべきかと悩んだり、またより低年齢の子どもでは、補習校で国語算数以外の科目はやっていないために、日本の学校へもどったときの勉強について心配が大きい。

日本語への不安

「長くいるとバイリンガルのようになるが、日本語の方があやしくなる。日常会話は不自由しないが日本語の語彙が絶対に不足」(Hさん；高1)。「単語がすぐにでてこない。ドライブしていて子どもが牛を見て「あ、ゾウがいる」というのを聞いてごくショックを受けた親がいる。また助詞の使い方がうまくできない。「が」「を」など。親に何かをやってほしいといたいのにそういう言い方にならない」(Sさん；小2)。英語は現地校の子と同じぐらいになったが日本語が全然ダメ、怪しくなってきた。この間も平家物語がぜんぜん分からない。『なにこれ言葉？日本語？』と言っていた。」(Nさん；中2)。「母語の確立という意味で、上の子は小学校教育をしっ

かり日本でしてきたからいいけど、下の子は中途半端になっている。こちらで（英語を母語として）確立できればそれでもいいけど、途中で帰らなくてはいけなくなる可能性が高いから」（Wさん；小2）。などのように、滞在が長くなると、今度は日本語に関する問題が生じてくるようになる。日常でも英語使用の家庭環境にある現地校の生徒に比べると英語の獲得レベルにどうしても差が生じてしまうということもあり、また補習授業校の学習と家庭での日本語使用のみでは、日本語の獲得も日本在住のようなわけに行かず、結局両方ともが低いレベルになってしまう、つまりセミリンガルになってしまうのではないかという心配が生じてくる。

ある父親は、「結局は、親がしっかりとした考えを持って、子どもを導いてやらなくてはいけないんでしょねえ。子ども達がどのように進んでいくかは、そのことが一番関わっているんじゃないかと思いますねえ。」と語っているが、父兄達は日々悩みながら、色々の可能性を探りながら、また一人一人の個性を考えながら、各家庭でそれぞれの方針を定め、進めて行っているのが現状である。

まとめ

現地校と補習授業校という二重学校生活をこなしながら、ポートランド補習授業校に学ぶ日本人子女達は時間的にも労力的にも大変な努力を重ねている。日本国内の日本人生徒や現地校生徒に比べて、土曜日朝から午後までびっしりと勉強の時間がつまっております、また現地校の宿題の他に補習授業校の宿題もこなす必要があり、やるべきことのかなり多い厳しい生活が、滞米期間中継続している。

現地校での学習には、これまでに見てきたようにさまざまな困難がある。まず言語面から見ると、渡米直後は、英語が話せない聞けないという問題に直面せざるを得ない。そして、子ども達の中には情緒的に不安定になるものも少なくない。しかし、父兄座談会で語られているように、子ども達の努力とその柔軟性と家族の協力とによって、時間経過とともに何とかそれを克服し、現地校適応を果たしていつているのである。しかし、現地の子ども達と同様な英語能力の獲得は容易なことではなく、かなり年数を経ても言語に関する困難と葛藤は続いていることが、調査や面接からわかった。

したがって、その十分ではない言語を使いながらの現地校での学習は、また容易なことではない。その第一は、英語の聞き取りができない、発表ができないというような英語能力に関する困難であるが、そのほかに、各教科における学習の際には、外国人であることの特有の困難

があることが述べられている。英語においては学年が進むに連れて内容的に高度になり、その理解が容易ではなくなってくる。理科学習においては、日常の言語と格闘している段階の子ども達にとって、一度に多数の学問用語や言い回しがでてくることが学習の困難として最大のものとなっている。また社会科においても、同様な用語の問題があるが、そのほかにその社会で育ったものにとっては常識として入っている知識が欠落していること、これまで日本で学んだときは立場や考え方が異なっていて理解がスムーズに行かないこと、などが困難点となっていることがわかった。

しかし一方で、日本国内や補習授業校での学習のおかげで、算数（数学）に関しては困難を感じる事が比較的少なく、むしろ日本人生徒達の得意科目として現地校で一目置かれることも多く、そのような科目があるということで日本人生徒達が救われている部分が多いようである。

異文化環境の中で勉学を続けることは確かに大変ではあるが、一方ではまた得られることも多い。その一つが、質問紙のなかで子ども達が多量に記述しているように、英語能力の獲得である。そして二つ目は、日本以外の文化、考え方、社会を知ることができるということである。多文化社会アメリカで色々な出身国の人々に接し、言語のみではなく、様々な文化や考え方に身をもって接した経験については、子ども達自身そのことを大きく評価している。そして三つ目に、このような環境に一定期間身を置くことにより、多くの情報を得た上でより客観的な視点を持つという態度が育って行くなれば、これらのことは彼らの大きな長所となるだろう。これらの三点は、国際化時代を生きていくものの資質として、これから重要なものと見なされると考えられる。たまたま父親の仕事や家庭の事情から、他の言語を学び他の文化を知ることになるような境遇になったことをポジティブに捉え、苦労は多かったけれども得るところも多くあったのだということを評価している多くの子ども達に、今回出会うことができた。これらの子ども達の中からも、これからの国際化時代を担う人材が育っていくことを期待したい。

本校を終わるに当たって、ご協力いただいたポートランド補習授業校の校長先生、教育長はじめ事務所メンバーや各先生方、座談会に協力して下さったお母さん方、面接や質問紙調査に応じてくれた生徒さんたちに、心から感謝を捧げたい。

文 献

- Goodman, R. 1990 Japan's 'International Youth':
The Emergence of a New Class of School
Childre, Oxford University Press, 1992 長島信
弘・清水郷美訳『帰国子女 : 新しい特権層の出現』
岩波書店
- 梶田正巳 1997 異文化に育つ日本の子ども 中公新書
- 梶田正巳, 佐藤郡衛 1999 ロス・アンジェルスにおけ
る日本人の子どもの教育—その変容のダイナミズム—
名古屋大学教育学部紀要 (心理学), 46, 4-14.
- 南 保輔 2000 海外帰国子女のアイデンティティ 生
活経験と通文化的人間形成 東信堂
- 箕浦康子 1984 子どもの異文化体験 : 人格形成過程の
心理人類学的研究 思索社
- 齊藤耕二 1983 児童・青年期における異文化体験と日
本社会への適応 : 帰国子女のカルチャー・ショック
調査から 星野命・齊藤耕二・菊池章夫編『異文化
との出会い』 24-42 川島書店
- 佐藤郡衛 1997 海外・帰国子女教育の再構築 : 異文化
間教育学の視点から 玉川大学出版部
- 早矢仕彩子 2000 ポートランド地域の日本人子女の学習
環境について 平成11年度文部省科学研究費研究成
果報告書「北米地域在住日本人子女の異文化適応—
学習・言語・アイデンティティの評価」研究代表
梶田正巳
- 山本雅代 1991 バイリンガル : その実像と問題点 大
修館書店

(2000年9月16日 受稿)

ABSTRACT

Adaptation of Japanese Students in Portland Japanese School — Language, Academic Achievement and Identity —

Masami KAJITA and Saiko HAYASHI

There are about 280 students in Portland Japanese School. They go to American public schools on Monday through Friday and go to Japanese School on Saturday. Though there are many kind of difficulties daily in the American public schools in terms of languages, academic achievement and so on, and they have tight schedule, they manage to adapt to the double school situation.

Students answered the questionnaire distributed in Japanese school. Some of them were interviewed. And two round table talks by their mothers were held as well. 109 questionnaire data were collected and analyzed.

The discussions were done from the aspect of language, academic achievement and their identity.

Students struggle with the rapid change of surroundings, language problems and academic achievement difficulties. But many of them accept the experience positively because they can get broader view and language ability and so on. It is emphasized the struggles are not only for student themselves, but also parents' at the same time.

key words: adaptation, Japanese Overseas, language, academic achievement, identity

付録 ポートランド補習授業校質問項目 (ルビ削除)

アンケートをおねがいします

これは、アメリカにいるみなさんが、どのように勉強しているかをしらべて、どうしたら困ったことをなくすることができるかを考えるためのアンケートです。
 あなたの名前は書かないでいいですが、ほんとうのこと、思ったとおりに書いてください。

ポートランド補習授業校 [] 年 [男・女] [19 年 月生まれ]

現地校 (アメリカの学校) の名前 [] 学年 grade []

★これまで、どのくらいアメリカにいましたか。…… [] 年間くらい。

★アメリカに来たのは何才のときですか。…… [() 才のとき ・ アメリカで生まれた]

★アメリカに来て(生まれて)、いちばんよかったと思うことは、どんなことですか。
 []

★アメリカに来て(生まれて)、よくなかったと思うことは、どんなことですか。
 []

【A】日本から来て現地校に入った人にたずねます。

1. 最初にアメリカに来たとき、何年生に入りましたか。…… [] 年生
2. どんなクラスに入りましたか。…… [ESLだけ ・ ESLと普通クラス ・ 普通クラスだけ]
3. 今はどんなクラスに入っていますか。…… [ESLだけ ・ ESLと普通クラス ・ 普通クラスだけ]
4. ESLについて、

ESLを終えた人……・ [] 年間勉強して、[] 年前に終えた。

ESLで勉強中の人……いま [] 年目。

ESLのクラスは何人くらいでした (です) か。…… [] 人くらい。

ESLのクラスで楽しかったこと、困ったことは、どんなことですか。

楽しかったこと : []

困ったこと : []

【B】現地校と現地校の科目についてたずねます。

1. 現地校で楽しいこと、困ることは、どんなことですか。
 楽しいこと : []
 困ること : []
2. 現地校では、次のうちどの科目がいちばんむずかしく、どの科目がいちばんやさしいですか。
 いちばんむずかしい : [英語 ・ 算数 ・ 理科 ・ 社会科]
 いちばんやさしい : [英語 ・ 算数 ・ 理科 ・ 社会科]
3. 現地校での一週間の時間割を書いてください。
 またそれぞれの科目について、よくわかる◎、だいたいわかる○、ほとんどわからない△をつけてください。
 (たとえば、○MATH のように)

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1.					
2.					
3.					
4.					
5.					
6.					

4. それぞれの科目について、あなたがむずかしいと思うところ、やさしいと思うところ、その理由(わけ)を書いてください。

- 英語で、むずかしいのはどんなところですか。 それはなぜですか。
 { }
 英語で、やさしいのはどんなところですか。 それはなぜですか。
 { }
 算数で、むずかしいのはどんなところですか。 それはなぜですか。
 { }
 算数で、やさしいのはどんなところですか。 それはなぜですか。
 { }
 理科で、むずかしいのはどんなところですか。 それはなぜですか。
 { }
 理科で、やさしいのはどんなところですか。 それはなぜですか。
 { }
 社会科で、むずかしいのはどんなところですか。 それはなぜですか。
 { }
 社会科で、やさしいのはどんなところですか。 それはなぜですか。
 { }

【C】家での勉強のようすについてたずねます。

1. 家での補習校の勉強時間(宿題, 予習, 復習など) : 一週間で { } 時間くらい。
 2. 家での現地校の勉強時間(宿題, 予習, 復習など) : 一週間で { } 時間くらい。

【D】英語と日本語についてたずねます。

1. 英語のテレビやビデオを見るのは……………一日に { } 時間くらい。
 2. 日本語のテレビやビデオを見るのは……………一日に { } 時間くらい。
 3. 読書は日本語と英語では…………… [日本語 ・ 英語] のほうが多い。
 4. お父さんお母さんから話しかけられることばは…………… [日本語 ・ 英語]
 5. あなたがお父さんお母さんに話しかけることばは…………… [日本語 ・ 英語]
 6. きょうだいと話すことばは…………… [日本語 ・ 英語 ・ きょうだいなし]
 7. 今, あなたは日本語で,
 話すことは [よくできる ・ だいたいできる ・ あまりできない ・ ほとんどできない]
 聞くことは [よくできる ・ だいたいできる ・ あまりできない ・ ほとんどできない]
 読むことは [よくできる ・ だいたいできる ・ あまりできない ・ ほとんどできない]
 書くことは [よくできる ・ だいたいできる ・ あまりできない ・ ほとんどできない]
 8. 今, あなたは英語で,
 話すことは [よくできる ・ だいたいできる ・ あまりできない ・ ほとんどできない]
 聞くことは [よくできる ・ だいたいできる ・ あまりできない ・ ほとんどできない]
 読むことは [よくできる ・ だいたいできる ・ あまりできない ・ ほとんどできない]
 書くことは [よくできる ・ だいたいできる ・ あまりできない ・ ほとんどできない]
 9. 英語と日本語で, どちらが得意ですか。
 話す・聞く, は [英語のほうが得意 ・ どちらも同じくらい ・ 日本語のほうが得意]
 読む・書く, は [英語のほうが得意 ・ どちらも同じくらい ・ 日本語のほうが得意]

10. 現地校で休み時間に友達が話している英語は、どれくらいわかりますか。
 [よくわかる・だいたいわかる・あまりわからない・ほとんどわからない]
11. 現地校の普通クラスの先生が授業中に話している英語は、どれくらいわかりますか。
 [よくわかる・だいたいわかる・あまりわからない・ほとんどわからない]
12. 授業中に自分の考えを英語で発表できますか。
 [よくできる・だいたいできる・あまりできない・ほとんどできない]
13. レポートや作文を英語で書くとき、どれくらい自由に書けますか。
 [よく書ける・だいたい書ける・あまり書けない・ほとんど書けない]
14. 次のようなとき、日本語と英語のどちらを使いますか。
 夢を見るとき [日本語・英語・半々] ; 数を数えるとき [日本語・英語・半々]
 びっくりしたとき [日本語・英語・半々] ; けんかするとき [日本語・英語・半々]
 家族と食事をするとき [日本語・英語・半々]

【E】友達についてたずねます。

1. 現地校で、いつもいっしょにランチを食べる人がいますか。…… [いる・いない]
 それはどこの人ですか。…… [日本人・その他:]
2. 現地校で、英語や勉強を教えてくれる友達はいますか。…… [いる・いない]
 それはどこの人ですか。…… [日本人・その他:]
3. 放課後や休日に家に遊びに行ったり、来たりする友達 はいますか。…… [いる・いない]
 それはどこの人ですか。…… [日本人・その他:]
4. 親友(いちばん仲のいい友達)はいますか。…… [いる・いない]
 それはどこの人ですか。…… [日本人・その他:]

【F】アメリカに来てからのあなたの変化についてたずねます。

1. アメリカに来てからのあなたは、日本にいたときのあなたとは、変わったと思いますか。
 [すごく変わった・すこし変わった・変わっていない]
2. 変わった人は、どんなところが変わりましたか。 いくつかでもいいですから、教えてください。
 また、自然にそのように変わったのか、自分で努力して変えたのかも、 教えてください。
1. [自然に変わった・自分で努力して変えた]
 2. [自然に変わった・自分で努力して変えた]
 3. [自然に変わった・自分で努力して変えた]
3. アメリカに来てから、あなたの、日本についての考えが変わりましたか。
 変わった人は、どんなところが変わりましたか。 いくつかでもいいですから、教えてください。
1.
 2.
 3.

アンケートはこれで終わりです。ありがとうございました。